

## [体育・保健体育]

## 組体操の「共創空間」が生み出す教育的価値

小川 茂\*

## 1 はじめに

平成20年3月に告示された新学習指導要領において、「体づくり運動」の一層の充実が謳われている。そして、学習指導要領の体育科の目標の最初に、「心と体を一体としてとらえ」という一文が明記されている。すなわち、心と体を一体とした体育が望まれており、運動によって体と心がどのようにかわり発達していくのか、この点を理解し、見つけ、研究していくことが体育科では重要となる。そのために、様々な運動での具体的な活動を通して、心と体が深くかわっていることを理解する必要がある。例えば、体づくり運動における、体ほぐし運動では、仲間と豊かに交流することをねらいとしている。つまり、運動を通して、仲間とのかかわりを強いものにしたたり、よさを認め合えたりするという利点が挙げられる。

また、体育科では、「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団活動や身体的表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」<sup>1)</sup>を改訂の趣旨として示している。体を動かすだけが体育科のねらいではなく、コミュニケーションを通しての言語活動を生かすことで生まれる気持ちの言語化を重視することであると私自身考えた。つまり、コミュニケーション能力の育成が、身体面だけではなく、情緒面の豊かな育成には必要であると考えた。

田沢小学校で行われているスポーツフェスティバル(運動会)の中に、組体操がある。私は、この田沢小学校に脈々と受け継がれている組体操に並々ならぬ魅力を感じている。組体操を終えたときに見られる子どもたちの満面の笑みと感動の涙。そこには、ここでしか感じることでできない独特の空気感があった。地域からの期待も高く、組体操が始まるころになると観客の大移動があるくらいである。組体操を終えたときに、観客が感動で涙している姿を多く見ることができた。演技している主体的な立場と、見ている側とが一体となって同じような感動を得ることができるのは、そこに組体操が生み出した大きな空間があったと実感した。

今、組体操は危険が伴う等の理由から、実施している学校は少ない。規模を縮小している学校も少なくないだろう。そのような現実がある今だからこそ、組体操がもたらす個の成長と集団としての一体感が生み出す感動をもう一度見直したい。そこで、この空間が生み出す効果を本研究テーマと位置づけ実践する。

## 2 主題設定の理由

## (1) 組体操についての定義

濱田(1996)は、「組体操はパートナー・エクササイズ(partner exercise)とかペア・ジムナスティクス(pair gymnastics)といい、二人以上の人たちが組んで行う体操です。すなわち、互いに力を貸したり、体重を利用し合ったり、体のもつ特質や技術を提供し合うことによって、一人では得られない効果をねらう体操です。」<sup>2)</sup>と述べている。また、「スポーツが体育の教材として多く取り入れられている現在、ともすれば体育は競争、競闘だけの場になり、勝敗や記録の更新だけが優先される場になりやすいものです。しかし、人間の社会が勝敗や闘争だけで成り立っているわけではありません。集団による協力や協同、援助、連携、支えが必要です。」<sup>3)</sup>とも述べている。このことから、組体操には、今の教育に必要な要素を多く含んでいることがわかる。この要素を子どもたちに実感させることで、組体操という競技から人として大切なこと、生きていく上での糧を得ることに繋がるであろう。

\* 糸魚川市立田沢小学校

## (2) 「共創空間」における視点

組体操は、一人ではなく、支え合いの中でよりよい効果をねらった体操である。そこには、必然的に相手とのかかわりが生まれる。かかわりなくして組体操は成立しないと言っても過言ではないだろう。つまりそこには、一人では成し遂げられない暗黙の了解が存在している。この暗黙の了解が存在する空間内で、子どもたちは、共に協力し合い、組体操を創り上げていく。この空間を「共創空間」と名付ける。以下、本論文中にこの言葉を使用する。

## (3) 「かかわり」について

かかわりとは、「関係、つながり」<sup>3)</sup>といった意味がある。つまり、何かとかがわるときには、そこに関係性やつながりが生まれる。対象が人であった場合、かかわることにつながりが生まれ、信頼感が生まれ、意見交流があったり、このような行為が行われることで、よりよいかかわりへとつながっていくと考える。我々は、かかわりの中で生きている。このような具体的な動きの中から生まれ発展していくかかわりを大切にしていくことが重要である。このかかわりと本論文中における「共創空間」との関係性を論じていく。

## 3 研究の目標

本研究では、一人では成し遂げられない暗黙の了解が存在している組体操において、この暗黙の了解が存在する空間を「共創空間」と名付ける。この空間の存在が、子どもたちが組体操を創り上げていくために重要な役割を果たしていることを検証していく。

## 4 研究の視座と方法

### (1) 研究の視座

中田(1993)は、『例えば他者の感情が押し迫ってくる時の雰囲気は、感性的に知覚されず、「肌で感じる」といった比喩的な表現が最もぴったりするような仕方では、感知されない。』<sup>4)</sup>という表現を用いている。「共創空間」とのかかわりの中が、子どもたちの身体的、精神的な発達と大きくかかわっていくことを本研究の視座とする。中田が述べているように、組体操という独特の「共創空間」の中で、私自身が感じたものを、疑い得ないこととしてとらえ、子どもの変容が、どのようなかかわりの中で生まれたかを場面分析的に検証していく。

### (2) 研究の方法

本研究に望む3つの視点を以下のように設定する。

- ① 「共創空間」における子どもたち同士のかかわり
- ② 「共創空間」における教師と子どもたちとのかかわり
- ③ 「共創空間」における第三者とのかかわり

この3つの視点から組体操とかかわり、研究目的の達成を図る。

## 5 研究の実際

本研究は、平成21年度第6学年41名がスポーツフェスティバルに向けて行った、4月中旬から5月下旬までの約1ヶ月の取組である。

### (1) 「共創空間」における子どもたち同士のかかわり：実証①

森(2009)は「身体と脳の同時の活性化」<sup>5)</sup>が重要だと述べている。「どうしたらよいか。」「成功するための秘訣はなんだろう。」と考えて取り組むことで、運動、ここでは組体操が活性化すると考える。

組体操の中で、子どもたちが特別な思いを寄せているのが、「タワー」である。組体操のラストを飾る大技で、毎年見てきている子どもたちにとって、6年生になったら大技に挑戦したいというのが大きな目標となっている。

今回取り組んだタワーは「3段タワー」である。この3段タワーでは、土台となる段、真ん中の段、一番上に立つ段の3つの役割が存在する。3段タワーは、1段ずつ円になって組み、最終的に全員が立ち上がる技である。それぞれの段で自分たちの役割を理解して取り組むことが成功への手がかりとなる。

タワーには本番10日前から取り組んだ。最初は、子どもたちの中から「やってみよう!」「おもしろそう!」という

声が聞かれた。この段階では、中村（1993）がいう組体操における「体が震えるほどの緊張感を感じる場」<sup>6)</sup>という価値には届いてはいない。実際にタワーに挑戦したときには、やはりうまくいかない。「みんなしっかりやってよ。」という声や、中の段からは「しっかり支えてよ。」など、相手に対する非難の声が多く聞かれた。子どもたちは、まだこの時点でも、成功への見通しがはっきりしていない。その後、教師からの「どうしたら成功できるのか。」という問いかけにたくさんの意見が出た。先述したような意見がある中で、「もっと声を出していこう。」「もっとくっついた方がいいんじゃないか。」という意見が出てきた。共に創り上げていこうとする雰囲気が漂い始めた。

その後の練習では、自分たちでどうしたらいいのか考えて取り組み始めた。最初は、話し合いの時間を教師側で設けたが、子どもたちから1回終わるたびに「みんな集まろう。」という声が聞かれ、自主的に話し合いの場がもたれた。話し合いが確保されることで、自分たちの思いを互いにすり寄せ、成功への糸口を子どもたち自身で手繰り寄せることに繋がった。「もっと近づいて組もう。」という声から、上からの力を受け取るために必要な動作を見つけたと感じた。力の均衡や均等な分散は組体操では重要になる。「声を出して、いけるかどうか確認しよう。」という声からは、お互いに鼓舞し合うことで、心から体へとつながっていく効果が考えられる。現に声を出し始めたときから、簡単な失敗が防がれた。この言語化という面で見ると、アドバイスし合う姿も見られた。同じ段同士のアドバイスが主であったが、上に乗る段の子どもからのアドバイスが始まった。うまく立ち上がるためにしてほしいことや、立ちやすい位置の確保などである。このアドバイスを取り入れたことで、更に技としての完成度が上がってきた。また、上の段は、上に乗らずに下の段の立ち上がり方や、手の組み方を見るようになった。そこでアドバイスすることで下の段からは、「こう?」や「もう少し空けた方がいい?」「肩の高さを揃えないと。」など導入時に比べて、発言やつぶやきも具体性を帯びてきた。この時期から、練習場所には緊張感が漂い始め、高い集中力が見られるようになった。独特の雰囲気と空気感があり、それらが漂っている空間が存在していたように感じた。子どもたちの意識は、成功するためには自分の役割だけではなく、隣との協力、同じ役割同士のかわり、同じ技に挑戦する全体のつながりへと移行していった。ここに、「共創空間」が存在していたと感じた。スポーツフェスティバル前に次のような作文を書いてきた子がいた。

A児：組体操では、1人技ととみんなで心を合わせなければできないスペシャルタワーなどがあります。みんなで団結して成功させたいです。(一部抜粋)

B児：ぼくは、最後のスポフェスを、みんなで協力して、最高のスポフェスにしたいと思います。成功させたいものがあります。サポテンです。去年のスポフェスでは、落ちたからです。もう2つあります。タワーとブリッジです。両方とも支えるので、くずれたらみんなくずれます。成功させたいです。(一部抜粋)

支え合うことでタワーが完成することに気付いている様子がうかがえる。子どもたち同士が、「どうしたら成功するのか。」という大きな目標に向かって取り組んだことで、本番の素晴らしい演技に繋がった。

また、当日、肩に自分のめあてを書いたテープを貼った。文字言語として表すことで、周りへ自分の意識を伝えることと、周りの意識を感じることで自分自身の気持ちを高める作用があった。スポーツフェスティバルが終わった後も、そのテープをノートの最初のページに1年間ずっと貼り続けていた子がいた。当日の感動がもたらした効果であると同時に、今までの練習の積み重ねから沸き出た思いの表れであった。

## (2) 「共創空間」における教師と子どもたちとのかわり：実証②

先述した「3段タワー」における実証を論じていく。

「3段タワー」は、本番10日前から取り組んだ。ここには教師の意図がある。子どもの意識や集中力を高める効果をねらった。早く取り組んですぐに成功してしまうと、子どものタワーに対する意識が低下すると考えた。意識の低下は、けがが発生しやすい状況を生んだり、演技としての完成度が低くなったりするという現実を招きかねない。そこで、あえて本番間近に設定することで、緊張感や集中力を最高レベルにして本番に臨めると考えた。

ここでの子どもたちの様子は、本番間近ということで、どうしたら成功するのかすすんで話し合う姿が見られた。もうふざけていられないという



一人一人の意識が全体へと波及しているように感じた。教師が意図して組んだ取組時期が、子どもたちの集中力を高めて創り上げていく空間へと招いたのではないかと考える。

もうひとつ、タワーを創り上げていくときに取り組んだことは、全員の意思決定を重視した点である。つまり、組体操の最後の大技は自分たちで創り上げていくという強い意志が必要であると考えたからである。タワーに取り組む時に、必ず全員を集め、教師側から幾つかのタワーを提示した。その中で自分たちが取り組むものを決め、全員一致するまでそのタワーには挑戦しないということを行った。最初は幾つかあったタワーも全員の話し合いで、2つに絞られた。より高度な演技に挑戦したいという子どもたちの意思決定で、安全面に配慮しながら取り組んだ。体育では、子どもたちがつくりやすいものを提示しがちである。私は、子どもたちに本番に対する強い期待と挑戦心を生ませるために、敢えてそうではない取組を行った。

難易度の高いタワーは何度行っても成功しなかった。挑戦しやすい3段タワーにしたと考え、促そうとしたが、話し合いの中で妥協する考えは出てこなかった。誰一人諦める子どもは出てこなかった。5日前に女子のタワーが完成し、残るは男子のみとなった。普段は自分の意見をあまり言わない子どもも、「挑戦したい。」という意思を見せ、同じ技に何度挑戦しても、緊張感や集中力が低下する姿は見られなかった。私は、この空間に不思議な感覚を覚えた。今まで取り組んできた体育では、同じ練習をしていると集中力が切れ、だれてくる状況が生まれていた。しかし、このタワーの練習では、そのような状況が生まれなかった。ここに共に創り上げようとする一人一人の思いが空間を支配しているのではないかと感じていた。意思決定の場を設けたことは、意識を向上させるために有効であったと考える。

最終的にみんなで決定したことは、本番3日前に3段タワーにすることであった。自分たちで決定したことだったので、このタワーへの挑戦を嫌がる子どもは誰もいなかった。教師として、ここで3段タワーに挑戦する意味をみんなに問うた。ここで意識を低下させ、集中力を切らすことは、本番の演技に大きな影響を与えると共に、組体操に臨む5年生、6年女子の演技力低下を招きかねない。つまり、「共創空間」としての効果が逆効果になると考え、男子全員に話した。ここで、みんなで意思確認ができたこと、組体操に対する思いを確認できたことは、結果的に組体操全体の成功へと導いたと考える。この点を考えると、空間が及ぼす影響は大きいと言える。空間、雰囲気は周りの意識へと作用していく。強く「共創空間」の重要性を感じた。

### (3) 「共創空間」における第三者とのかかわり：実証③

「共創空間」を創り上げているものが、子どもたち同士、教師と子どもの中で生まれると実感していたが、それだけではないように感じていた。それが何であるか。その点について論じていく。

体育は通常、私と教務主任の2人で6学年41名を指導してきた。しかし、組体操では、安全面を考慮し、より多くの職員の指導が必要である。そこで、体育に携わっていない6年2組担任教諭(学年主任)や級外職員が指導にかかわってくれた。そのことにより、子どもたちの行動はきびきびしたものになった。それは、視線、表情からも緊張感をもって取り組んでいることが理解できた。通常の状態に、新たなエッセンスが加わると雰囲気が変わることがある。この組体操では、その状態が顕著であった。「H先生が見に来ているよ。」と嬉しそうに話し、演技に臨む姿勢にその状態を感じることができた。組体操が創り出した「共創空間」に、自分たちが見せたい対象である第三者が現れることで、より緊張感が漂い、成功への流れができやすいのではないかと感じた。

この状態がピークとなって表れたのが、校長や養護教諭などが前日に来た時である。「いい演技を見せよう。」「緊張するな。」というつぶやきが聞こえた。第三者とのかかわりが子どもたちの緊張感、集中力の向上につながり、



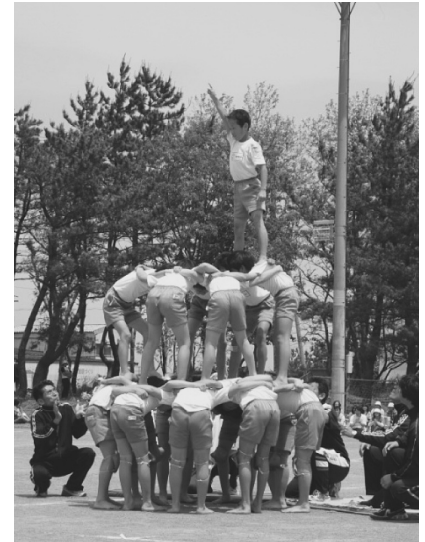


今までにない演技の美しさが見られた。通し練習も3回程しか行わなかったことも、子どもたちの緊張感を高めた効果につながった。

第三者とのかかわりは、職員側だけであるという感覚をもっていたが、そうでないことを実感することができた。それは、スポーツフェスティバル本番に生まれた。1～4年の児童と地域の方々である。地域の方々には、この組体操に対する思い入れが強い。そう感じたのは、組体操の前に地域の方がいい位置で見ようと移動した姿を見たときである。本番前に大半の子どもたちが自分の保護者を探し、手を振るという仕草があったり、見付けて名前を呼んでいたりする光景を目にすることができた。地域の方々には、組体操を食い入るように見つめ、演技後感動の涙を流されていた人を多く拝見した。自分の子どもではなくても、涙を流し「よかったよ。」と私に声を掛けてくれた。組体操が、すでに会場全体を言葉では言い表せない空間へと変えていった。家族や顔見知りを超えて、組体操そのものが、見ている人の視覚的情報へと捉えられるだけでなく、心へと伝わり、感動へと導いた。子どもたちの中にも涙する姿を多く見ることができた。「共創空間」が成功へと導いた。

また、応援してくれた1～4年の子どもたちの存在も大きい。始まる前に「がんばってね。」と声を掛けている下級生が多くいた。この声掛けが演技者の心へと伝わり、「よし。」と自分を鼓舞したり、「がんばろうね。」と友達同士で意思確認をしている子がいたり、子どもたちの意識を向上させるために効果があった。

この点から、人とかかわりの枠を超えて、組体操が行われる会場全体が、すでに「共創空間」となっていたのではないだろうか。共に創り上げていくのは、演技をする子どもたち同士で生まれてくると感じたが、それ以外に、見てくれている人、応援してくれる人、指導にあたっている人で共に創り上げていると実感した。



## 6 考察

「共創空間」には不思議な力がある。そう感じることができた。この空間を生み出している主たるものは、演技者の存在であり、そこに付加される緊張感や集中力がさらに「共創空間」を創り出していく。そして、その空間を生み出すために、教師側の支援もあった。それは、子どもの気持ちを高める音楽であったり、今回取り入れたダンスであったり、太鼓の響きであったり、いじめ根絶宣言と関連させて地域へ宣言したり、が考えられる。教師は、いかに素晴らしい組体操にしていくかということを常に考えて、子どもに提示していった。この教師の思考も、すでに子どもたちが創り出している「共創空間」に取り込まれている。つまり、子ども同士で創るのではなく、空間はそこに携わる人間も一員となって創り上げているのではないだろうか。

スポーツフェスティバルが終わって、次のような感想を書いた子がいた。

C児：自分と仲間を信じて、競技に臨むことができました。自分と仲間を信じて、両方が支えあって、心をひとつにして、創りあげたということは、それが結果につながらなかったとしても変わることはありません。どの種目でも、仲間と自分を信じて、みんなでやったからこそ、成功したのです。「信じる」ということは、お互い支えあい、心を1つに全力をささげるということです。そのことができたということは、とてもすごいと思います。(一部抜粋)

この内容から、組体操がねらう要素である「協力」を通して、「信頼し合うこと」へと思考を移行させていったことが伺える。つまり、練習を通して、協力するためには相手との信頼関係を創り出すことが不可欠であることに、この子は気付いたのである。「共創空間」において、心を合わせて一つの方向をめざすことは、さらなる雰囲気づくりにつながる。ここで心を合わせていった要素としては、アイコンタクト、掛け声、アドバイスが挙げられる。



本論文で実証①から実証③まで論じたが、それぞれが個々に成立していると同時に、相互に関連し合うかわりでもある。組体操にかかわる全ての人が、同じ意識をもったり、こうしたいという意識の高まりがあったりするとき、「共創空間」のさらなる深まりが生じる。そこでの子どもたちは、協力し合い、信じ合い、支え合い、一つのを完成させる大切さを肌で感じる事ができたのである。組体操は体育的な要素を多く含むと同時に、人として成長していくための大切な要素を多く含むものであり、その基盤としての「共創空間」の意義は大きいと考える。

## 7 成果と課題

組体操を通して、クラスは劇的に変化した。協力し合える素地はあったものの、そこに信頼し合うことの大切さ、心一つにすることで生まれる感動を学ぶことができた。

次のような卒業文集を紹介する。

D児：（前略）練習では、いろんな所で心を1つにしました。例えば、組体操では、気持ちを合わせないと最高の演技ができません。女子はスペシャルタワーをやる予定がありませんでした。しかし、女子の真剣な気持ちが伝わって女子もタワーに挑戦する事になりました。その時の、私の気持ちはやる気でいっぱいでした。次の日から、体育館には、かけ声がひびきわたるようになりました。みんなの気持ちが1つになろうとしている、そんな気がしました。そして本番。きんちょうしていました。でも、みんなは笑顔でした。私は、みんなの笑顔に、たくさんの勇気もらいました。

（中略）組体操の成功は、みんなとの絆が深まった瞬間でもありました。

この子にとって、6年間で1番印象に残ったのが組体操であった。この文章を読んだときに組体操は確かに子どもの心に残ったと感じた。この絆の深まりは、同じ目標に向かって努力した仲間とのつながりであり、みんなで同じ方向を向いていたからこそ、大きな感動がある「共創空間」に包まれたのではないだろうか。この空間に出合い、子どもたちの意識が向上していく様子に出会えたことは幸せに思う。今後は、組体操以外でも見付け、実証していきたいと考えている。

課題としては3点挙げられる。1点目は、組体操における安全面である。組体操の「共創空間」が生み出す教育的価値を探るために、子どもたちの意識の向上をねらった。そのためには、体が震えるほどの緊張感を感じたり、集中力を高めたりする必要がある、子どもたち同士的意思決定を重視する必要がある。しかし、事故に繋がってからは遅い。この点に注意して、更なる「共創空間」の高まりを検証していきたい。

2点目は、組体操を通して子どもは隣接する友達の運動状況を把握し、力を協調させながら一つの運動を成立させるという運動感覚を身に付けたと感じた。さらに組体操における各運動局面について分析を加えて、詳細な運動技能を明らかにしていきたい。

3点目は、道徳との関連である。小学校学習指導要領解説の付録6に「道徳の内容」が掲載されている。つまり、体育科も道徳との関連を図っていくことが、重要であるということがうかがえる。今回実証した「共創空間」は、体育科の枠を超えて、日々の教育活動に繋げていくことが、本当の価値なのではないかと感じた。心の育成と体育科の目標でもある、心と体を一体としてとらえていくことが、これからの体育科で重要視していかなければならない点である。本論文で取り上げた組体操による実践は、共に支え合い、共に鼓舞し合い、共に信じ合える要素がふんだんに詰まっており、これからの体育科がめざすもの的一端であると確信する。

### 〈引用文献〉

- 1) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説体育編」 平成20年 p3
- 2) 濱田靖一 「イラストでみる 組体操・組立体操」 1996年 大修館書店 はじめに
- 3) 松村 明 「大辞林」1988年 三省堂 p419
- 4) 中田基昭 「授業の現象学～子どもたちから豊かに学ぶ」 1993年 東京大学出版会 p121
- 5) 森 知高 「体育の見方、変えてみませんか」 2009年 学習研究社 p133
- 6) 中村徳稔 「体育授業づくり全発問・全指示」 1993年 明治図書 p11